

平城宮跡東方官衙地区の調査（平城第429次）

平城宮の東区朝堂院と東院の間には奈良時代の中央省庁である官衙が南北に並んでいたと考えられています。この場所を東方官衙地区とよんでいます。2006年度から数年にわたって調査する計画をたて、今回はその第2回目となります。調査は2008年1月11日より開始し、2008年5月7日に終了しました。調査区は南北と東西にそれぞれ90m、130mの長い区画を設定し、発掘総面積は約1,300m²になります。途中3月30日には現地説明会をおこない、あいにくの雨でしたが約500名の方に来訪いただきました。

発掘調査の結果、東西調査区のほぼ中央に平城宮内の排水を流す基幹排水路が南北に通り、これをはさんで2つの官衙区画が東西に配置されていることがあきらかになりました。便宜上、東側の区画を東区画、西側の区画を西区画とします。

基幹排水路は調査区の東端でもみつかっています。いずれも幅4m弱の南北方向の溝で、水の流れによる溝岸の浸食を防ぐために、木杭を列状に打ちこんでいました。また、南北調査区の南端には東西方向の溝が確認されました。

官衙の東区画は平城宮廃絶後の水田造成により、当時の地面が大きく削平され、区画や建物の存在をしめす遺構の状態はよくありませんでした。しかし、南北にながれる2本の基幹排水路と調査区南端の東西溝の位置から、東区画はこの3本の排水路に囲まれた内側に存在していたと推測できます。



東西調査区（西から）

東区画内にはいくつかの建物がみつかり、いずれも掘立柱建物で、少なくとも1回以上の建て替えがあることがわかりました。主なものでは、南北9間の南北棟建物や南北7間、東西2間の南北棟総柱の建物などがあります。東区画の南半部分では2つの土坑がみつかり大量の遺物が出土しました。

西区画は東区画と同様、区画施設の築地塀そのものは残っていませんでしたが、築地塀の存在をしめす雨落溝を確認したので、区画の東西幅は51mほどになります。西区画内には同じ規模、同じ構造の2棟の建物が東西に並んで検出されました。東西5間、南北2間以上の東西棟で総柱の礎石建物です。高床式の倉庫であろうと推測しています。礎石据付穴の一部には礎石や根石が残存しており、建物の東西両脇では雨水をあつめる溝を検出しました。

この礎石建物の周辺には同様の倉庫が複数集中しているとみられ、平城宮内での位置や平安京の建物配置などを参考にすると、国家の米倉であった可能性が高いと推測しています。

今回の調査では土器、墨書き土器、瓦、木製品、木簡などが多く出土しました。瓦は東区画の南北棟建物付近、西区画の建物の雨落溝に集中しており、東区画の土坑からは花文鬼瓦、木製品、木簡などが出土しました。土坑の木簡は770年前後の近衛府、兵衛府に関わる削屑などが1,000点以上出土しており、今後の整理と解説が期待されます。

（都城発掘調査部 今井晃樹）



南北調査区（北から）